

ラミィ・ねね・ポルカ
「「「頑張れししろ
ん！！！！」」」 ぼたん
「w w w w w w」～リイ
ンバウムに迷い込んだ
ホロライブ五期生～

SOD

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ホロライブ・プロダクションに所属するアイドルVTuber。

我らが5期生がコラボ配信中にいつの間にかリンバウムに転移していた!!
しかもカラダはホロライブ!!

言えばなんとかしてくれる『獅白ぼたん』

顔が肝臓『雪花ラミイ』

男子小学生『桃鈴ねね』

おまるん『尾丸ポルカ』

ホロライブ5期生の4人は果たしてこの先生きのこれるのか!?

ラミィ・ねね・ポルカ「「頑張れししろん!!!」」

ししろん「お前らも戦えwwww」

突発的に書いたので、続くかは人気次第ですね。

目次

- 「えー!!なんで〜!!」—— 23
- ししろん 「力が欲しいか……wwww」
- w w 「ねね「力が欲しいな」—— 30
- ねね 「お前もねっ子にならないか?」読者 「すまねえSSRBなんだ」読者 「同情で票入れようと思ったけど雪民のプライドが許さなかったんだ……」—— 40
- 夜会話——『??』—— 49
- 二日目
- ポルカ 「で、このドラゴンなんかはぎ取れたん?」ぼたん 「鱗が固くて無理です」
- ねね 「これ食べられるかな?」ラミイ 「拾い食いやめなー!!!」—— 57
- 「えー!!なんで〜!!」—— 1
- ししろん!!! 「ぼたん「草」—— 1
- ポルカ 「ラミイとねねちに見捨てられたんだが!」ぼたん 「おまるん、弓狙いづらいからちよつと食べられてて欲しい。」
- ポルカ 「ししろん!?!?」—— 10
- ねね 「何故ねっ子だけやたら少ないのか!?!」ラミイ 「メタ発言やめなーw」
- 16
- ねね 「これでラミイ水も許される……」
- ラミイ 「いやラミイ水は許せんわ」ねね

かなた「リインバウム？」白上「現実
じやい。」友人A「事後処理が………つつ」

64

ねね・ポルカ・ラミィ「二助けてししろ
ん!!!」ししろん「やつべえ死にそうw w

w

70

ねね「ねねも頑張るぞ!!」ぼたん「成長
したな……ねねちゃん。」

80

『ポルカ、おるか？ポルカおらんか？』
ポルカ「サモナイト石返せ」

86

ポルカ・ラミィ（絶句）

98

ラミイ・ねね・ポルカ「「転生したぞししろん!!!!」」ぼたん「草」

ねね「えー！えつくす！えー！ぜつとあーるえつくす!!」

ラミイ「ねねちゃんもうちよつと小さい声でお願いしたい！」

ポルカ「見てから回避出来ない余裕でした！」

ぼたん「回避出来てねーじゃねーかよwww」

その日は、5期生でコラボ配信をしました。

ラミイ・ねね・ポルカ「助けてししろん!!!!」

ぼたん「wwwwww」

ほんといつもどおりの配信をしてただけなんだよねー。

5期生全員でのコラボ配信。あたしがいつもどおりパンパン撃って、ねねちゃんが騒いで、おまるんがひいひい言つて、ラミちゃんがツッコんで。楽しい配信してたんですよ。

いや〜…ほんと何が悪くてこうなったんだらうね？

ラミイ「え……？どこ此処？え？何で私ラミイになってるの??」

はじめに異変に気づいたのがラミちゃんだった。

私達はホロライブプロダクションというVTuberアイドルの事務所に所属するタレント。

ネット世界の中でのみ、私達は私達ではなく、VTuberアイドルになれる。

『私』が『獅白ぼたん』でいられるのも、当然ネットの中のみの特権だ。

なのに何故か私達……

ポルカ「おまるんになってるうううううー!??!」

ねね「うおわっ!?ねねじゃん!?ねね、ねねになってる!!」

ホロライブ5期生こと『雪花ラミイ』『尾丸ポルカ』『桃鈴ねね』そして私『獅白ぼたん』。何故か機材も何も無いのに、カラダがホロファイブになって、しかもなんか海辺の、明らかに人工整備がされてない草ボーボー、樹木生える天然の島みたいな場所です。がってました。

鏡も無いけど、衣装は見慣れたものだし、あともう手先の肌ツヤとかそういう明らかに自分じゃないカラダの美しさ。

そして少なくとも他3人の容姿が互いに完璧に把握できるわけだから、自分がホロライブになっていることは瞬間的に把握できるわけだから、自分がホロライブ。

ぼたん『わー……何が起きたんだこれ？おわっ!?コケる!?!』

ししろん手足長っ。身長高っ。バランス取りづらいぞこれ。

ウエストが細いのナイスボディはガチで嬉しい。あ、尻尾も生えてる。こいつ動くぞ。

ラミイ「ちよっ、これどうなってるのー!?!」

ラミちゃんはありえない非現実には納得の出来る答えが出ずに狼狽えて。

ポルカ「あっ!? そう言えば、配信途中じゃん!! ヤバい放送事故!!」

根が真面目ちゃんながら人格百面相なおまるんは、頭の切り替えが早いのか現実逃避なのか分かりづらい反応をして。

ねね「ねえ何でねねだけ初期衣装じゃないのー?

せつかくなんだからボンボン付きにすれば良かったのにー!

BANか!? こんなところでもBANなのかー!」

ねねちは、もう既にこの状況に適応して自分の衣装が初期衣装じゃないことにブーたれていた。

さすがねねち。男子小学生の異名は伊達じゃない。

とりあえず、みんなが一緒だったことで私も少しずつ頭が落ち着いて、視野が広がってきた。

すると、近くの木に刺さっている物が目に入る。

ぼたん「矢じゃん。」

ねね・ポルカ「ヤダー!!」

ラミイ「言うとする場合かつ!! 何で矢が刺さってんの!? ホントにここ何処なの!?! 何で私

達ホロファイブなの!？」

ぼたん「いやー分かんないなあ…」

運営のドツキリとかだったらもうホロライブ世界取れるで。

とか

お肌ピチピチの美少女になれたし良いんじゃない？

とか、ふざけたことはいくらでも言える程度には頭は回ってるけど、この状況は私も教えて欲しいわ。

ねね「ねね分かった!!これ異世界転生だよ!!

ねねたちきつと異世界にいるんだよ!!」

ポルカ「……………あー…そう、なんかかな？」

ラミイ「いやいやいや!!嘘でしょ!?!そんなことある!？」

ポルカ「だって……………ねえ? 私達ホロファイブなことがまず全然つ説明出来ないし

さあ」

ラミイ「やだやだやだ!!絶対やだ!!お家帰してええええー!!!運営さあああーん!!
ラミイギブアツプですううー!!」

みんなが話をしている横で、私は刺さった矢をそつと抜いてみる。

鏃が付いている。試しに葉に当ててスツと引いてみる。ナイフみたいに、それが当然の現象であるかのように切れる。

弓はあるのだろうか?周囲を見回す。

ぼたん「……………あつた。弓」

あつてほしくは無かつた気もするな。でもこれはまだギリギリ地球にも現役で使っている国があるからまだ多少はセーフで…………

「ギャギャギャー!!!」

ラミイ「ひいつ!?!」

ポルカ「きやあつ!?!」

ねね「うおっ!! 出た!!」

緑色の、四足歩行。

尖った口にギザギザの歯。

手先には水かき。

魚類が人型になったような何かが、突然森の奥から姿を見せた。

それは当然、地球では確認されたことの無い生き物。

それは勿論、V T u b e rとは違うし人間でも無い生き物。

「ギャギャギャー!!!」

ラミイ「も、モンスター……ウソお……ウソでしよう……」

ポルカ「これはヤバイよ!? 明らかにキバ向いて威嚇して来てるよ!」
ねね「モンスターとの初戦闘キター!! あれ? 武器は??」

私達、ホロライブ5期生。どことも知らない場所に、本当に異世界転生しちゃったみたいですね。

アレ……?」

ぼたん「これ、あたしが戦うしかなくない?」

手元には弓と矢が一本きり

どうやら、初戦闘はオワタ式の一発勝負をぶっつけ本番で強制されるクソゲー仕様らしいです。

慣れないカラダに射った経験の無いガチ弓と、ガチモンスターと殺し合いかなぁ……うん。

ぼたん「みんな!!逃げるぞ!!」

ラミイ・ポルカ・ねね「はい!!!」

息はピッタリ仲良し5期生。一斉にバラバラに逃げ出したのでしたとき。

ポルカ「ぎゃあああああー」
!!!!!!」

あ、おまるんが追われた。

11 ポルカ「ラミィとねねちに見捨てられたんだが!?!」ぼたん「おまるん、弓狙いづらちょっと食べられてて欲しい。」ポルカ「ししろん!?!?!」

「ギャギャギャギャー!!!」

ポルカ「もう着いてくんなやああああああああああー!!!」

現在わたくし尾丸ポルカ。異世界に飛ばされたと思つたら魚8人間2くらいの割合の魚人モンスターに追われています!

魚が陸地走ってんじやねえよ。綺麗なフォームだなアオイ!?!陸上部行けつ!!後ろ振り向けよ、ししろん走って来てんだろうが!!

「ギャギャギャー!!!」

ポルカ「ああああああああああああー!!!」

ぼたん「ちなみにラミちゃんねねちゃんは別方向に逃げました。」

ポルカ「これ死亡フラグどつちだ!?!あと仲間の薄情さに涙が止まりません!!木も邪魔なんだよ!!!」

不規則かつ無作為に生え散らかしている自然の木々を避けては走り避けては走り。

こんな地球温暖化だの森林伐採だのと騒いでる惑星のお隣さんは、ほんとーに自然豊かで美しいですねえ。羨ましいですよー。

ぼたん「ねえ、おまるん。走つたままで弓で狙うのきついから止まってー」

ポルカ「え、あ、はい。いや死ぬが?」

ぼたん「いや、おまるんはダイジョブだ。」

ポルカ「何が???」

ぼたん「おまるんは元気があるからダイジョブだ」

ポルカ「元気で命が買えるかア」

!!!!

ぼたん「wwwwww」

ゲラゲラ笑ってやがる…だと!?まさかこのライオン、この魚人と一緒に私を食うために付いてきたんじゃねえのか!?

「ギャギャギャ」

ポルカ「お前もこころなしか笑ってんじゃねえよ!!」

埒が明かない!話が進まない!このままじゃ私は助からない!!延々走り続けることになる。

何故か不思議とまったく疲れないけど後ろから着いてくる疲労以上の敵が怖い!

ぼたん「ところでおまるん。私ら明らかに本来の肉体スペックが無視された体力してるよね?」

息一つ切れてないぞ」

ポルカ「それは思った!絶対に今私達は肉体年齢とかがホロフアイブに依存してる!

絶対に若返ってる!

青春取り戻せるぞこれ!!生き残ってさえいたらな!!」

ぼたん「んで敵が魚人? なわけじゃん。」

ポルカ「魚人だねえ! アーロンかな?」

ぼたん「周囲は自然に囲まれてるじゃん?」

ポルカ「ワイルドライフだねえ!! だから何!?! ししろんにはもしかしたら分かっ
てないかもしれないんだけど、ポルカ今ちよっと軽く命がピンチなんよ!!」

ぼたん「おまるんが木に登ればそいつ追ってこれんくない? おまるんつてたしかサ
カス団員でしょ?」

何をバカなこと言ってるんだよししろん。いくらサーカス団員だからってそんな簡単
に木に登るなんてこと出来るわけないっしょ?

ほら見てみるよ、足元で木をガリガリしてる哀れな魚人を――

ポルカ「……………あ、登れたわ。」

「ギャギャギャー!!!」

ぼたん「よしよし。そして弓なんて射ることのないライオン生を生きてきたこの獅白
ぼたん。」

一本しかない矢で敵をキルしたいなーなんてそんな時に取る行動はー」

しゅつとした綺麗な足を肩幅に開き、弓矢をつがえたししろん。それまでタレ目寄りだった目が一瞬で変わる。

「ギャギャ!? ギャーオ!!」

ようやく振り向いたことで、魚人はししろんに気がついた。でも、もう遅い。

普段はグライオン、お猫さま、ししろん。可愛げいっぱい最期まで愛嬌たっぷりな獅白ぼたんは、今はもう

ぼたん「おいしい。あと1秒遅かった。FPSでは致命的だよ」
獲物を狩る獅子だ。

「ギッ——!?!」

つがえた鏃の先の1秒先はを見据えた景色は、3cmにも満たない生と死の間を貫く。

現実と真実の旋律が、未来を——否、モンスターの一瞬の絶叫死を奏でた。

ポルカ「………言えばなんとかしてくれるー獅白ぼたん。」

ぼたん「Beautiful」

15 ポルカ「ラミィとねねちに見捨てられたんだが!?!」ぼたん「おまるん、弓狙いづら
ちよつと食べられてて欲しい。」ポルカ「ししろん!?!?!」

野性味あふれる表情と、健全な子供のような心境で、ししろんはやりきった顔で笑っ
た。

ポルカ「実際に目の前でやられると……惚れるわあ、ししろん。」

ねね「何故ねっ子だけやたら少ないのか!!」ラミイ「メタ
発言やめなーw」

こんらみです。ホロライブ5期生雪花ラミイで――

ねね「ねっ子がいなあああああ――ーいっ
!!!!??」

ラミイ「きやつ!?!なにになに?!?どうしたのねねね!」

ねね「ねっ子がいないんだよう!!」

ラミイ「意味が分かりませんが!?!」

ねね「どうして意味が分からないの!?!ねっがいないんだよ!!この小s――!!」

ラミイ「メタイこと言うのやめなー!!!」

改めましてこんらみです。雪花ラミイです。突然ですが私の悩みを聞いて下さい。

今私は、頼れるららいおんことししろんと逸れてしまい、よりにもよって一番面倒くさい同期であるねねねと二人きりになってしまったのです!!

ねね「あー、おまるん、元気にしてるかね？ねね達完全に見捨ててきちやつたもんねえ」

ラミイ「それはさー……あー……言いつこなしじゃん……？やめなー。」

ねね「おまるん、センシティブなことになつてないと良いけど」

ラミイ「やめなー!!!ちよつとお！バカかお前は!!」

お、おまるんが、あの怪物と……人じゃないじゃん!!」

ねね「えー、そんな珍しいことじゃないでしょう？割と人間と人外のさあ」

ラミイ「やめなあああああああああああーーーー!!!」

ラミイ↓天の視点

獅白ぼたん、上手いこと敵を打倒しました〜はい拍手〜。

ポルカ「ああ……すまないねえ異世界座員さん第一号。ポルカはアイドルだから、無理やりなお触りは垢BANしかないんだよ……」

ぼたんがヘッドショットを決めてお亡くなりになった座員○に両手を合わせて黙禱を捧げるポルカ。

その目には僅かな涙。襲いかかってきたとはいえ、それでも自分を気に入って追いかけてきた命に、僅かに思うところもあつたのかもしれない。

その横には、遺体を漁る獅白ぼたん。

ぼたん「なんか良いものドロップしないかな?」

ポルカ「ちよお!?!ポルカの座員さんなんですけど!?!」

ぼたん「愛してやれないならいつそ極限まで突き放してやるのも優しさだつて」

ポルカ「突き放すどころか、身ぐるみだけ分離させて同行させようとしてますがそれは?」

ポルカの言葉にゲライオンしながら、ぼたんは剥ぎ取りを続けつつ話は逸し始めた。

ぼたん「いや、格好良く決まったねえ、これはSSRB団から着火済みが増えるかえ」

ポルカ「うん、まあ。ポルカ散々な目に遭いましたけどね?」

ぼたん「上手いこと連携も出来てたし良かったねえ」

ポルカ「うん。ポルカは走って木に登っただけでしたけどね? 犬かな? 煽てられて木に登ったのかな?」

ぼたん「でも一本しか無い矢も使っちゃったし、次に敵が出てきたら本当に危ないね。おまるんが」

ポルカ「いやその理屈はおかしい。ポルカ達二人なんだから危険は半々でしょ!?!ポルカが狙われる前提なおかしい!!」

ぼたん「だつて事実狙われてたじゃん。新しい座員さんにw」

ポルカ「だから剥ぎ取りやめーやめー!!それポルカの座員さんー!!」

ぼたん「おお!斧持つてた。ドロップドロップ♪」

ポルカ「何故。」

ぼたん「んー。あ、これねちちゃんしか装備出来ないって書いてあるじゃん。

あとであげよう。」

ポルカ「へ?いやいや、ししろw装備出来ないって、ゲームじゃないんだからw」
ぼたん「いやでもほら、よく見るとこれステータス表示されてるよ?」

ポルカ「……………は????」

ぼたん「に言われたポルカは、言われるがままに穴が開くほど凝視する。すると……」

種類：斧 名称：ゴールドアクス ATK75 CRT5

装備可能キャラ 桃鈴ねね

ぼたん「どーよ。」

ポルカ「なん……だと?」

ぼたん「これで殴ってもダメーじ入らないかな?おまるんで試していい?

ポルカ「ダメだよ。ポ虐反対。」

ぼたん「普通www」

まあ、いいや。とりあえずドロップ品も手に入ったし、まがまが探そつか。」

ポルカ「自由か。」

ラミイ「お前を……ドラゴンの餌にしてやろうかああああー!!!」
 ねね「やばいよやばいよラミイ怒り狂ってるよ!!後ろのドラゴンよりも怖い!!あれ?
 ねねどつちから逃げてるんだっけ?」

「ガアアアアアアアアアアー!!!」

あ、まずいドラゴンが火拭いてる!!

ラミイ「くつ……!!前方のねねねに後方の竜!!」

ねね「ラミイ本当にねねも敵認定してるの!?5期生の絆は!?」

ラミイ「一緒に運ぼうって言ったのに一人だけドラゴンから逃げたのは絶対に許さないからっ!!」

ねね「えー!もう許してよお。ラミイちゃんだって絶対ねねの側だったらねんを置いて逃げてたでしょう?」

ラミイ「それは——そう……なんだけどお!」

ねね「絶対に許せないことなのかな?よく考えてみて?死にたくないって意外と悪いことじゃないよ!」

ラミイ「ラミイは死にたくないからねねねを許さない!!ねねねをドラゴンの餌に使う

ラミイ「会長基本ヒト型やろがい!!」

足元に落ちている石を拾っては投げて、ラミイから離れて行くねねは超優秀!!コケるラミイとは違うのだよ!!

それにしても、今更だけドドラゴンつてさあ……ここゲームの世界なんじゃないの？あつ……。

ラミイ「ねねねコケたあああああああああ——?」

ねねコケたあああああああ——!!!!

「ガアアアアアアアアアア——!!!!!!」

ねね「これはやつばい……つつ!!」

ラミイ「ねねちゃんつ!!!逃げて!!」

ねね「そう言われても間に合わないよつ!!もうダメだ!!ねね死ぬ!!!」

ラミイ「いやいやいやいや!!マズイマズイマズイ!!!!」

走馬灯のようなものが、特には駆け巡らない。
その代わり、視界を埋めたのは翡翠色の閃光^{フラッシュ}。
それから、直後に真っ白の景色。

ねね「……………え？」

「ガアアツ!？」

ラミイ「……………うそ。」

『やめなー!!!』

何故か『やめなー』がそこにいた。

ねね「あああああああああああーーーーー!!! 『やめなー』
ラミイ「やられたが!?!」
!!!????」

明らかにやられたが!?!白かった見た目が丸焦げじゃん!!

ねねの腕に抱かれてピクリとも動かない!!

ねね「そんなバカなあ!?!ねねの生み出した『やめなー』がやられたあああーー!!
ねねの不屈の精神は受け継いでいないのかあ!?!こうなったらもう、ねねがすーぱーね
ねちになるしか……!!」

ラミイ「もう好きにしてくれっ!!!!」

ねね「うおおおおおおおおおおおーーー!!!!」

ばるくっつ!!!!

ラミイ「……ん???'」

何だ今の擬音?何かが膨張するような音が聞こえる。

ねね「はあああああああああああ………!!!」

なんか、なんだろう……??ねねね、でかくなってね??

こう……筋肉つて言うか、なんかデカ……デカいつ!!?

ラミイ「ねねね!!あんたどうしたの急に!？」

ねね「は あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

あ—————!!!」

ドン——!!!

!!!!!!!

ねねねが一際大声で叫んだ次の瞬間に、空気抵抗の壁を破ったような音が鳴って、ねねの立っていた場所の一部がクレーターのよう扶ける。

更に赤いオーラまで出している。えっと……ドラゴンボール??

ねね「時間がかかってすまなかったなあ……」

ラミイ「何いつてんのあんた!??」

いつの間にか腕に抱かれていた『やめなー』は消え去って、ねねねはマジで超サイヤ人みたいになった。

ドラゴンの首を両手で掴んでトウギャザーしていくう！

さつきまであのドラゴンに命を脅かされていた気がするんだけど、気づいたら異種属格闘技戦になっていた。

何言ってるのか、ラミイも分かんないが、もう勝手にしててほしい。

はい地面に落とされたドラゴンが反撃とばかりに爪で攻撃していくう！！

ねねねこれを避ける！だがしかしドラゴン！ねねねを完全には回避させない！

ねねね、反撃の右アツパー！ドラゴンは尻尾で応戦だあ！

攻めるねねね！受けて反撃するドラゴン！たまに炎吐いて牽制するあたり多分ねねねより知能が高い！！

うくん、ねねね焦る！！なんか少しずつ赤いオーラとマッスルが萎んできている気がする！！

ねねね攻めきれない！！このまま負けてしまうのかー！！

ラミイ「——はっ!?負けたらラミイも食われるやんけ!!!ねねねー!!負けるなー!!!」

ねね「声援が遅い!!!あとだんだん力が入らなくなって来たから助けて欲しい!!ラミイ!!つらら攻撃だ!!」

ラミイ「できるかー!!!」

ねね「はあっ…はあっ…!!くっそーこのままじゃ『やめなー』の仇が取れないよお!!!」

ねねねはふざけ倒しているけど、このまま本当にねねがすーぱーねねちモードじゃなくなったら私達死ぬが!!

誰かー!!助けてよおー!ししろーん!!!!

「力が欲しいか? w w w」

ねね「えっ!?!」

ラミイ「はっ!?!この凛々しくしようとして結局耐えきれずにゲラる芸風は……!!!」

辺りには森の樹々。もう自分達がどっちの方向から来たのかすら不明。

圧倒的遭難。圧倒的迷子。にも関わらず、この声には、なんとかしてくれる頼もしさがある。

ラミイ「ああっ!!ししろん!ラミイを見つけてくれたんだ!ししろん!しs………」

周囲を見渡して、探していた銀色を見つけ出した私は——言葉を失った。

ポルカ「(ちーん。)」

ぼたん「ポルカ、生きとるかー?」

ポルカ「(白目)」

ラミイ「……………何事!」

ぼたん「いや〜おまるん、私の足に書いて来れなくってさあ。でもラミちゃんの悲鳴は聞こえるし、森の中におまるん捨てていけないから。やむを得ず尻尾掴んで引きずって来たwww」

ラミイ「……………可哀想。おまるんはラミイの悲鳴の犠牲になったんや……………」

こんなにボロボロになって……………おまるん。

ねね「ねえー!!!おまるんは分かったからちろん!!ねね、力が欲しいなああああー!!!」

あ、そうだった。こんなことしてる場合じゃない。

ぼたん「はいよー。麵屋ぼたん、特殊ウーバーシープー丁。おまちどう!!」

ブンツ!!と両手で何かをねねに放り投げるしろん。

ねね「キヤツチ!!」

こうして、ねねのクソダサネームの必殺技で首を落とされたドラゴンが絶命したことに、ようやくラミイ達は一息つくことが出来るようになったのでした。

いや名前ダツサ!??

ねね「お前もねっ子にならないか？」読者「すまねえSS
RBなんだ」読者「同情で票入れようと思ったけど雪民の
プライドが許さなかつたんだ……」

ららーいおん。ららーいおん。採算度外視ららーいおん♪

ホロライブ5期生、獅白ぼたんですー。

現在、異世界に転生そうそう散り散りになったラミちゃんとねねちゃんとの再会を果たした獅白ぼたんと尾丸ポルカの二名はですね。

ねねちゃんがすーぱーねねちになつて放った必殺技『爆裂セクシーねねち斬』の犠牲者になったドラゴンから素材を剥ぎ取り、更に、ねねちゃんが余波で開けたクレーターのような大穴の中に隠れていた宝石を発掘しています。

もうねねちゃんが高く売れるって大はしやぎで回収しております。

ラミちゃんは疲労と恐怖が一気にぶり返してきて、さっきまで大泣きしてた後、今は木陰で休憩しており、私とおまるんは現在打つ手もないので、仲良く宝石を鑑定しております。

ポルカ「いやー死ぬかと思ったけど、今は宝石がガツポガツポかく世の中分からも
んよね。」

ぼたん「でもわたしとおまるんしか鑑定出来ないってのは意外だったねー。ゲームな
らステータス確認って標準装備で然るべきじゃない?」

ポルカ「それについては多分、私よりししろの方が鑑定の制度高い疑惑あるよね。
ししろに言われるまでポルカは全く気づかんかったし。あと眼力入れないと見えな
いせいで眼球もげそう。」

ぼたん「そうだねー。ラミちゃんが分からないって言ったのも地味に意外だったし
ね。」

一番後方支援とかになりそうなのに。」

ポルカ「ラミイが召喚獣召喚したって聞いた時はびっくりだっと思ってたもんねー。あ
とねねちの斧適正。」

あまりにもぴったり過ぎてもうさ……マジでゲームなんだなって感じ。」

ぼたん「そうだね。この『サモナイト石』とかだって明らかキーアイテムっぽいしね。」

おまるんは辛うじて見える程度の鑑定スキルは、私にははっきり見えている。

ねねちゃんが掘っている宝石は、灰色 赤 紫 緑 無色 この5種類。割と多めに発掘出来ている割にこの5種類意外は全く出てこない。

更に宝石ごとに名前が異なり、それぞれゲームの属性みたいなものを持ち合わせていることも分かった。

色ごとに 機属性^{灰色} 鬼属性^{赤色} 霊属性^{紫色} 獣属性^{緑色} 無属性^{無色}。

ラミちゃんの話と、戦いの後にいつの間にか手元にあつたと言う刻印が刻まれたサモナイト石を見るに、このアイテムで召喚獣を喚び出して使役するのが、正しい使い方らしい。

どうにも、各々が石を持つと僅かに反応を示す石がある。こうぶわくと発光するんだよね。

私は機属性。ラミちゃんが獣属性。ねねちゃんが鬼属性。

ラミちゃんが持ってた刻印の刻まれたサモナイト石が獣属性である辺り、それぞれが対応する属性みたいなものがあるんじゃないかもしれん。

ねねちゃんも赤いオーラを発して、反応を示したのが鬼属性なわけだし、あながち的外れってことはないんじゃないかなー？

あとは……まあ。うん。

ぼたん「はい、おまるん。機属性の石。」

ポルカ「うん? はい。」

手渡しでおまるんの手に渡る機属性。反応無し。

ぼたん「はい。鬼属性の石」

ポルカ「これわんちゃんどっちも”きぞくせい”って読むかね? はいはい。」

どうなんだろうねえ? 鬼属性、反応無し。

ぼたん「獣属性」

ポルカ「これがしろんやポルカじゃないのは気持ちスッキリしないな。」

ぼたん「ラミちゃんは獣耳めっちゃつけるからね。」

ポルカ「装飾じゃん!」

獣属性、反応なし。

ぼたん「ねねちゃんが鬼属性ってのは……やっぱあれアルかね?」

ポルカ「ああ……あれだろうねえ。アル。」

そして、最後に霊属性の石。

ぼたん「ラスト。霊属性」

ポルカ「唸れ!! ポルカの隠された才能!!!」

手にポトツと落とす。

ぼたん「反応………無し。」

ポルカ「あああああああああああああー!!!」

何故か、おまるんだけは、反応する属性が無かった。

ねね「あーあー疲れたあー。アレ？おまるんまだサモナイト石調べてたの？」

ようやく掘るのに満足したらしいねねちゃんが満面の笑みでクレーターから上がってくる。

まさかり担いだ金太ねね。いい汗かいたと頬もねねぱいも濡れている。

ポルカ「何でポルカだけ反応しないんだよ!?壊れてますか!？」

ねね「宝石が壊れるわけないじゃんw」

すつと鬼属性の石を摘むねねちゃん。

ぼわく。

ポルカ「うわあああああああーん!!! ポルカだけ差別されてるううううう

うううー!!!

ポルカだけぼわくしないいいいいー!!!」

ねね「まあでも、このままじやただ光るだけの宝石なんだよねえ……あーあつつい。」
やれやれといった表情でおまるの手にサモナイト石を戻したねねちゃんは、ひらひ
らスカートパンツ丸見えお構い無しで仰ぐ。

まあ、今更だね。この格好でさっきまで殴り合いしてたんだから。なお、ムキちに
なった時に伸びたため、コルセットはぶっ壊れたし一部の装飾もお亡くなりになってい
る。スカートが無事なのは、不幸中の幸いかもしれない。

今の格好で放送したら間違いなくぶっ●される。投稿サイト君に。

ホロライブサマーすら没収されたんだから。

野性味たっぷりアイドル服か……ねっ子は増えそうでもあるwww

ぼたん「まあ、どっちにしてもこんな島の中じやどうしようもないでしょ。

私達このままじゃ雨も風も吹きさらしな状態でサバイバルなわけで。」

本当は木でも切って急ごしらえでも小屋とか建てれば良いんだけど。ねねちゃん以外が斧を降つてもかすり傷一つ付かないし。

ねねちゃんは、すーぱーねねちゃんじゃ無くなつて斧を制動出来なくて、おまるんが5回ほどゆつくりしそうになったところで諦める判断を下すしか無くなった。というわけだ。

せめて火でも起こさないと本格的にやばいんだけど……こんな森の中で火事になつても洒落にならない。更にラミちゃんが動けない。

ポルカ「せめてここが無人島で無いことと、このサモナイト石が少しでも金銭の代わりになつてくれることを祈っているしかないわけだ。ぐすん。」

ねね「……………わたしたち、絶対に帰ろうね。」

ポルカ「うん？ どうしたん急にマジな顔で」

ねね「ねね、もつとねっ子のみんなに話を聞いて欲しい。ねっ子のみんなの話をききたい。」

歌を聞いて欲しいし、ダンスも見て欲しい。二人は？」

ポルカ「んー。今はまあ……ポロポロなんで風呂入りたかな。あとここで夜を明か

すと思うとマジで怖いので、誰か一緒に寝て欲しい。」

ぼたん「みんなで今日のコラボの続きをしたいかな。」

ねね「ラミイはー!?!」

ラミイ「…………お酒しやけえー」

ぼたん・ねね・ポルカ「デスヨネー。」

ねね「目的は違うけど、みんなちゃんと帰りたい気持ち忘れずに行こうね。」

人間、本当に追い詰められると、自分が本当にしたかったこと、忘れちゃうから。

わたし、まだV T u b e rでいたい…………。」

それは、普段私達が見ているのとは違うねねちゃんの表情だ。

『桃鈴ねね』の、ほんとうのきもち。

ねね「ねっ子のみんなが——大好きだあああああああ——————————」

!!!!!!!

島中に響くような大きな心こゑで、桃鈴ねねは大きく叫ぶ。それはいつものように、あど

けない、いつものねねちゃんの表情だった。

夜会話——『???』

日が昇って、日を見送って、闇に輝く月明かりが、この暗闇の島を照らす唯一の加護だ。

どうしよう。日が沈んでしまう。どうしよう。怖い夜が来てしまう。

V T u b e r の設定が大きく反映されているこのカラダでも、私は私で、心は変わらない。

キャラ崩壊なんて言わないで欲しい。これも私なんです。

はしやいで、騒いで、道化で、泣いて、落ち込んで……私は。

尾丸ポルカは、生きている。

こんなところにいきなり放り込まれて、眠れるほど私は強くはない。

いいや、私達は強くない。

ラミイと共に身を寄せ合いながら、不確定の闇に怯えて。

……何故かひとり大爆睡しているねねちは、ぶん殴つてもいいですか？

この娘は、緊張感とか無いんですかね？さつきなんかこういい感じに格好いい事言つてたような気がするのポルカの気の所為ですか？

ねね「ぐおおおくくZZZ」

ラミイ「……………ねねね、ぶん殴つてもいいかな？フフフ」

ポルカ「良いんじゃないですかねえ？フフフ」

それでも、このいつもどおりのねねちが、私達の唯一の精神安定剤になっているのも否めなくて。

ギリギリを保つてくれているのも。まあ、事実なわけですよ。

だが殴りたい。

ラミイ「ぐすつ……………お酒飲みたい。お酒飲んで眠ったら、ラミイのお部屋だったら良いのに。」

ポルカ「あー腹減った。なんでポルカ達はこんなところにいるんですかねえ？

ぶつちやけさあ、ししろがこういう世界に来るのはまだしつくり来るけど、ポルカいるか？

現状唯一なんの武器もありませんが？」

ラミイ「ラミイだって『やめなー』なんてネタ武器だよ。せめて進化後だいふくだつたらもう少し安心できたのに……………」

ポルカ「召喚してみれば良いんじゃない？『だいふく』とか『雪民』とかさあ。」

ラミイ「もうやってみた。」

ポルカ「やったんかい!?それで？」

ラミイ「だいふくも、雪民も、やめなーすら出なかつたよ。」

手のひらに乗った刻印付きの緑のサモナイト石を恨めしそうに見つめるラミイ。

ラミイ「なんで雪民さん出てこんのや!!ガチのラミイに会えるチャンスやぞ!!ラミイのこと愛しとらんのか!？」

ポルカ「んな理不尽な……。」

ラミイ「ぐすつ……雪民さぁん……ラミイにお酒持つてきてよお」

ポルカ「雪民さんも、お酒パシる為だけに喚ばれるのは嫌だろうねえ」
他愛のない雑談を続けて、続けて。

いつか、私達は眠っていた。

ららーいおん。獅白ぼたんです。ネコ科ですw

今私はネコ科の夜目を利用して『矢』を探しています。

何故かスポーン地点に弓と矢が一对になっていた。

現実的に考えても当然おかしいけど、ゲーム世界的に考えてもこれは異常だ。

矢が一本しか無い弓なんて……。

それに、単純に何故、海辺にそんなものが落ちていたのか。

その謎を解き明かすため、獅白ぼたんは森の奥地——スポーン地点へと向かった。

ぼたん「……………うくん。見事になんも落ちてない。流木すらないって言うのはなあ。」

ステステステと散歩ぐらいの気持ちで海辺を探索する。

ぼたん「このままじゃ、戦いで役立たずという新しい獅白ぼたんが誕生してしまう。

こうなったらおまるんを盾にして近接戦闘するしか……お？なんか光つてるとこある！

アイテムアイテム♪」

ししろんは、サモナイト石（霊）をひろった!!

ぼたん「まーたサモナイト石かー☒☒
もうそろそろサモナイト石はいらないです。ポケットもパンパンだしカバンも無い
んだもんなー。」

『——!』

ぼたん「およ?」

『——!』

ぼたん「声……?」

『——!』

ぼたん「誰……? 誰かいますかー!」

『——!』 ぼたんちゃん——!』

ぼたん「え!」

聞き覚えがある。この声……この声は——

ぼたん「かなた先輩!?!かなた先輩どこですか!!!」

『ぼたんちゃん?!繋がつた!!繋がつたよトワ!!』

『もう魔力も残り少ないよ!!急いでかなた!もう…かなりきつつい…』

『根性入れるのら!!トワトワ!!』

『もうムリムリムリムリ…!!早くしてかなたー!!!』

これ、もしかしてサモナイト石か?

『ぼたんちゃん!聴こえてる?かなただよ!』

ぼたん「はい!聴こえてますかなた先輩!!今私達はねぼらぼでいつの間にかドラゴンとかがいる島にいます!!」

あとサモナイト石とかいう石があります!どこかわかりますか!?

『やつぱり!!ぼたんちゃんよく聞いて!!そこは『リインバウム』っていう本物の異世界で、そこはハゲが作った人工島だよ!』

ぼたん「人工…?!?っていうか、もしかしてかなた先輩ここ来たことあるの!?!」

『そうだよ。ボク達も——四期生もまだココが現役だった時代に召喚されたことがあるの。』

その石をぼたんちゃんが持つてるからには、おんなじ島に召喚されてるはずだから、還る手段もちゃんとあるの。』

ぼたん「還れる……どうすれば良いんですか？」

『島の中心に、召喚のために作られた祭壇があるの。それを使えば還れる………んだけど、実は昔還る時に壊しちゃったんだよね。』

ぼたん「うええ?!?握りつぶしちゃったんですかかなた先輩?!」

『そんな拳デカくねえよ!!!——ってツツコませるなあ!!』

とにかく、ぼたんちゃん。まずはその島にあるはずの『メイメイさんのお店』を探して。そこにいるメイメイさんに事情を説明すれば力になってくれるはずだから!』

ぼたん「メイメイさんのお店?!この島無人島じゃないんですね……。」

『ううん。実質無人島だよ。なのに何故かそこでお店やつてるんだよ。』

ぼたん「その人大丈夫なんですか? (主に頭)」

『うん。まあ、酔っぱらいのヘラヘラしてるお姉さんだけど、まあ、大丈夫だよ。』

ぼたん「あー、わかりました。それで、メイメイさんの店つてどのへんにあるんですか?」

『メイメイさんのお店は、島の………。』

しーん。

ぼたん「………かなた先輩?」

サモナイト石、完全に沈黙。

ぼたん「……………まじかあw」

どうやら、通信が切れたらしい。

そう気づいたときには、新しい朝を告げるべく、朝日が昇り始めてきていたところだった。

ぼたん「かえるか。みんなんどこ。」

二日目

「ポルカ」で、このドラゴンなんかはぎ取れたん？」ぼたん「鱗が固くて無理です」ねね「これ食べられるかな？」ラミイ「拾い食いやめなー!!!」

ポルカおるよー。尾丸ポルカです。

新しい朝がきたー。希望ください朝ーだ………ああ………お腹減ったよお。

魚人やドラゴンが湧いてくる異世界生活の二日目でございます。水も見つからず、木の実のひとつも見つからず。ポルカは餓えています。

元気なのはねねちと、ししろんも平常通りを保っています。ラミイは………察しろ。

何て言うかさあ………ししろんはまだ分かるじゃん？獅子だしさあ。ご飯抜き2日3日は当たり前で言うし。

私は設定はクォーターで、四分の三は人間だ。

けど、ねねちは人間じゃん？何で元気なのって聞いたらなんて言ったと思う？

ねね「人間、ご飯や家が無くても一日二日くらいどうとでもなるんだよ。ねねは一日ガム一個の時代もあったからね!!」

……………ねねち…………。

少し涙が溢れた。

ぼたん「みんな、かなた先輩と連絡が取れたぞ!!」

ラミイ「え!? 本当に?」

ねね「おおー!!」

朝起きたら姿が見えなくて焦っていたししろが戻ってきた邂逅一番、そんなことを言い出した。

ポルカ「かなた先輩に? どうやって連絡取れたん??」

ぼたん「浜辺で矢が残ってないか探したら、またサモナイト石見つけてさ、そっから声が聴こえたんよ。」

なんとここ、昔、四期生も来たことがあるらしい。」

ラミイ「それじゃあ、還る方法もあるんだよね!？」

ラミイが希望に満ち溢れた声を出す。私ももちろんそれを期待している。

だって四期生は今間違ひなくわたしたちの世界にいる。つまり、この世界に来てから帰還しているということなのだから。

けど、ししろの返答は、そんな期待を真つ向から否定するものだった。

ぼたん「それが…島の真ん中に転送用の祭壇が有るらしいんだけど、四期生が還るときにぶつ壊したらしい……」

ラミイ「なんでよ!?!？」

ポルカ「そりゃあ、ドラゴンとかポルカたちの世界に来られても困るからでは？」

ラミイ「ううう……つつ」

恨めしそうな声で唸るラミイ。気持ちは分かる。そりゃあ、あんなのが来たら世界中大パニックだが、今のポルカ達にはその祭壇が壊れているのは死活問題だ。

もも「それで、これからどうすれば良いとかは聞けた?ししろん」

ぼたん「うん。話の途中で通話が切れちゃったから、全部は聞けなかつたけど、この島は無人島だけど何故かお店があるらしい。」

ポルカ「無人島にお店をやっている人……???え?それ誰が買いに来るの?」

ぼたん「さあ？でも私達がたどり着けばお客になれるんじゃない？

酔っぱらい店主らしいから、食べ物も食べるだろうし、水やお酒も」

ラミイ「お酒しやけえ!!？」

ぼたん・ねね・ポルカ「はいはいはいはい。」

ぼたん「まあ、そんなわけだから、私達はこれからメイメイさんのお店を探すことがメインクエストになります。」

ポルカ「この未開の島で、ドラゴン警戒しながら、どこにあるか分からない店を探すつて、無茶苦茶激むずじやん。」

初手のメインクエストとは思えねえ!!」

ぼたん「留守番したい？多分戻っては来れないけど」

ポルカ「同行させてくださいお願いします」

ししろん、この島に来てからポ虐が進み過ぎじゃないですかね？しまいにやポルカ、泣きますよ？

ぼたん「ねねちゃんは どうする？」

ねね「もちろん行くよ。ねねが行かずに誰が行くの？戦えるのねねだけなんだよ

」

ポルカ「その斧、主にポルカの首にばっかり来るんですけどね?」

ねえ「ああ、この斧は座員さんだったか?」

ポルカ「ポルカの座員さんはポルカの首なんて狙って来ないもん!!」

ぼたん「なお異世界座員1号」

ポルカ「やめろおおおおおおおおおおおおー!!!」

ねえ「そっか、これ座員さんの斧だったね。そりやおまるのところにいくのも仕方ない」

ポルカ「もつとお姫さま的に愛されたい……っっ!!」

ぼたん「さてと、それじゃあ特に準備もいらなだろうし『メインクエスト』『メイメイさんのお店を探せ』に出発しますか?」

ねえ・ポルカ「おー!!」

ラミイ「あのお……」

ぼたん「ラミちゃん?」

ポルカ「?どしたのラミイ?」

ねえ「何かあった?」

「ラミイ」……………恥ずかしながら、お酒が切れてもう動けまじえん。誰か助けてください……」

よく見てみると、なんか手が震えているラミイ。

え？そんな大げさにアル中な子じゃなかったよね？！？

ぼたん「……………もしかして、ラミちゃん。いや、私達のカラダって、ホロライブの設定だけじゃなくて、配信で積み重ねたリスナーからのイメージも誇張して現れてるのかな？」

ポルカ「……………もしかしてししろんが全然疲れてる感じしてないの？」

ぼたん「FPS配信してるし銃の知識もあるから『獅白ぼたんならサバイバルでも生きていけるんじゃない？』ってイメージが誇張されてるのかも。」

ポルカ「ねねちがねねちのままなの？」

ぼたん「ねねちちゃんなら『別にサバイバルぐらいでくたばらんやろ』ってイメージがあるのかもしれない。」

もともと社畜だったって言うし努力家でもある。更に小学生男子のイメージも手伝って最強に見えるのかも。」

ポルカ「そう言えば、ねねちって、19歳の設定だったな……………」

ぼたん「ブラック企業に努めて地獄を見てきたメンタルに、十九歳という若く瑞々しい肉体……………!!」

ぼたん・ポルカ「弱いわけがない!!!」

ねね「?」

わたしとししろが振り向くと、何か言った?みたいな顔してラミイをおんぶしていたねねちがいた。

ポルカ「あ、社長。ラミイはポルカが背負います。役立たずがんばります。チーズ。」
ねね「そう?じゃあねねはバトルで活躍するよ。ラミイは任せたよ!おまるん」

ポルカ「はい……………っ!!」

なんとなく頬を濡らした涙。

これは雨だな。きつとそうだ。断じて自分の活躍の機会がないことに関する悲しみの涙じゃない。

見せ場が……………欲しいです……………!!!!

かなた「リインバウム？」白上「現実じやい。」友人A「事後処理が……………っっ」

白上「えー……………皆様、おはコンでございます。白上フブキでございます。

本日はですねえ……………えーさくや——昨夜……………ですねえ。

不幸な事故が重なりまして。ねぼらぼコラボ配信。白上も4窓開いて観ていたわけなんですけども。急に四人全員の配信が突如途切れるという謎の現象が起きまして、ですねえ。白上、速攻デイスで連絡を取りましたところ、なんと音信不通!!」

コメント：おはコン

コメント：白上も観てたのか

コメント：4窓w

コメント：4窓ってwww

コメント：4窓はガチw

コメント：音信不通!?

白上「これはもう只事ではないと察した白上は真相を探るべく、専門家のえーちゃんに突撃した……………!!」

友人A「えー。皆様、おはコンです。ホロライブ事務所の裏方担当、友人Aです。今回は昨夜のねぼらぼコラボ配信が突如、止まってしまうという現象について、何か専門家として喚ばれてしまいました。

何故なんでしょうか……?」

コメント：草

コメント：頑張れえーちゃん

コメント：何だただの放送事故だったのか

コメント：安心したから白上の尻尾モフらせて

コメント：じゃ俺はえーちゃんのまな板でPHPHしたい。

コメント：PHPHするだけの大きさが——

コメント：→良いやつだったよ……

白上「——そんなわけで皆さん。昨夜のことはく忘れろビーム！」

コメント：V T u b e r っ て な ん で す か ?

白上「忘れ過ぎなんじゃない！」

配信が終了し、ホロライブの事務所には

ホロライブ一期生、兼ゲームーズのリーダー。白上フブキ。

そして、ホロライブ事務所の裏方。友人A

更に、四期生の天音かなた。姫森ルーナの四名が訪れていた。

友人A「それではかなたさん。状況の説明をお願いします。」

かなた「はい。今回の『ねぼらぼ』同時失踪の件についてですが、やはりボク達が睨んだ通りでした。

四人全員が、かつてボク達四期生が召喚された異世界『リンバウム』に召喚されていたことが、通信に成功したぼたんちゃんが発言で確認出来ました。」

ルーナ「残念なことにトワが途中でヘタれて通信が切れたから、詳しいことは聞けなかったのらく」

白上「トワ様は今どうしてるの？」

ルーナ「MP使いすぎて死にかけてるのらよ。あっちと違って、MP回復も体調依存だから無理なのら〜」

友人A「リインバウムですか。あの時と違って情報があるだけマシンではありませんね。おかげでフブキさんと一緒にある程度の説明配信をすることで炎上を可能な限り抑えることは出来たと思います。」

かなた「それで、とりあえずぼたんちゃんに、向こうでお世話になった『メイメイさん』という人のお店を探すようにだけ伝えたとこで、通信が切れてしまいました。」

白上「それじゃあ、四人は今無事なのかな?」

かなた「昨夜話した限りでは、ぼたんちゃんはあまり問題ないように感じました。」

他の3人がどうなのかは、確認できませんでした。けど、ボク達もそうでしたけど、あの世界に行くとな自分のVTubeとしてのカラダと、設定、リスナーからの印象で強烈なものが反映されて受肉します。

例えばボクが、『手のひらに収まる程度の大きさの程度のを握りつぶせる』『翼で飛べる』みたいな、オルタナティブに使えるような能力が付与されてました。」

ルーナ「ルーナは『ルーナイトを召喚できる』能力なのら〜」

白上「それじゃあ、四人にもそんな能力があるのかな?」

かなた「多分あると思う。ぼたんちゃん、声が少しわくわくしている感じがしてたか

ら。きっと本人も気付いているんじゃないかな？」

友人A「本当に、ホロぐらも真っ青な話ですね。」

白上「それはどうかかな？」

かなた「それは無いです。」

ルーナ「ないのらく」

友人A「あ、そうですか……。。」

かなた「危険性だけなら、リンバウムはホロぐらに負けないけどね……。。」

その頃、リンバウムでのねぼらぼ達は……

ぼたん「走れおまるん!!死ぬぞ」

ねね「頑張れおまるん!!」

ポルカ「む、無理い!!ラミイ背負つとるんやぞ!!」

ラミイ「ふにゆう……」

ねね「無理は嘘つきの言葉だ!!」

ポルカ「ふっぎけんあああああああああああーーーーー!!!」

ライオンのような顔の獣人が、弓を番えて襲つてきていたのだった。

ねね・ポルカ・ラミイ 「「助けてししろん!!!」「」ししろん
「やっべえ死にそう W W W」

獅白ぼたん、われわれ一同が挨拶できないこの状況をお許してください。

現在、ライオン顔の獣人が弓を番えながら迫ってきています。

ねねちゃんが接近戦を挑んだ瞬間、大剣に持ち帰られたので、今度はねぼらぼ一願となつて命辛辛逃げてます!

でもおまるんがラミちゃん背負つてて遅いんでもうあの世ストレスです。しかも逃げてる途中に一匹増えた!!

何故こうなつたのか?

遡ること……いや、時間が分からんな W

森の中を進んで、どのくらい時間が経つただろうか?

私は獅白ぼたんのカラダのおかげでもう、とにかく元気だった。獅子は良いぞ。つて感じでゴキゲンに歩いてた。

ねねちゃんもそんな感じだった。19歳の若い肉体。そこにねねちゃんメンタル。弱いわけがない。

子泣^ラきじじい^{ミイ}という宿業を背負い、生まれたての子鹿の如く勇ましい歩を進めるおまるん!

ポルカ「……………泣き、そう…」

ねね「おまるん、替わろつか?」

ポルカ「……………いえ、ガンバリマス。」

ぼたん「私かねねちゃんの方がずっと力あるんだけどね〜」

ポルカ「ポルカがやるのおおおおおおーーー!!!!!!」
(泣)

ぼたん「もう手出せねえじゃんwww」

ねね「いやーこれはしゃーないね。」

ぼたん・ねね「私達は悪くない!!」

こんな感じで、私達はメイメイさんのお店を探して、森を進んでいた。
そして多分数分後……………

ラミィ「ああ……ん……っ……」

ポルカ「ラミィー……!!死ぬ!!ポルカ達死ぬて!!ラミィもやぞ?!」

おまるんの背中で喘ぐラミィちゃんの表情は、女慣れしていない男性達をまとめてこう……ブルドーザーでガガガー!と恋の穴に落としていきそうな、潤んだ瞳と弱った表情をしていた。

これは魔性の女ですわw

まあ、この魔性の女、酒が切れてるだけなんですけどねw千年の恋も冷めるでこれは。

ぼたん「つと、流石にそろそろ助けに行かないとマズイな。」

タン、と地面を蹴ってカラダを可能な限り水平に保って直進していく。

まさに二足歩行の獅子にふさわしいスピードで走り抜く。ししろんのカラダじゃなかつたら絶対に出来ないね。

「GAAAAAAAAAO!!!」

遙か先に弓を番える獣人の姿。おまるんには見えていないようだ。

ヒュン——!!

私がおまるんに着くより先に矢が放たれる。間に合うか？

ぼたん「おまるん伏せ!!」

ポルカ「え!? ワン!!!」

獣の筋力で射撃された矢は撃つて来たと思つたらもう目の前にあるぐらい早い。

多分わたし以外見えてない説はある。だから矢は私が対処するしかない。

顔面アウトの射線から頭をずらして、矢を頭の横に迎える。ここまでくれば多分……

パシッ。

ぼたん「よし!! 矢確保!!」

ポルカ「え!? アンタ掴んだんか!」

ラミイ「……うにゅ……?」

ねね「いいぞしろん!!」

手に入れた貴重な一本の矢を番える。今更ながらこちら洋弓なので、素人でも全く撃

てないなんてことはない。

でなきやゼロ距離といえど射撃なんか出来るわけもない。

それでも私と獣人の距離は遠い。マイクラならギリ当たるかもな距離。素人が間

違つても射抜ける距離ではない。

よって

ぼたん「おし、逃げろおまるん!」

ポルカ「ポルカ、逃げます!!」

敵は獣人二匹。武器は弓と大剣持ちが一匹。槍持ちが一匹。

距離を詰めれば仕留められるかもしれない。弓持ちを倒せれば矢筒を奪えるはず。

いや、無理でしょ。ここはやっぱり……

ぼたん「ねねちゃん！足止めしよう！」

ねね「おっけー！」

槍持ちの獣人が迫ってくる中、ねねちゃんも追いついてきて、私の横を通り過ぎて行く。

両者激突する雰囲気。

弓持ちは私が弓を番えているのを警戒しているのか、私から目を離さない。

実力がバレてないって素晴らしいですnee w

ぼたん（……けど、連携が出来るほど知能はヒト寄りのモンスターなんだね。

畏にハメてトドメだけ刺すって言うのは、無理臭いなあ。）

ねね「おりゃあ!!」

考えを纏めている間に、ねねちゃんが槍持ちにたどり着いて交戦開始。

勢い良く攻めているような声を出しているけど、槍のほうが当然リーチは長いし、斧は

劍と違つて刃を当てて引けば斬れるつてわけでもなく、ある程度振り回して、打撃に近い行動を取らなきゃいけない。

「ガオツ!!」

ねね「くっ……!!」

それに引き換え、槍の方は自分のカラダを小さく纏めて腕を前に出すだけで、外皮が柔らかい相手には十分な殺傷力がある。

どうあがいても、直線で攻撃してくる槍に、曲線で攻撃する斧が速さで勝てるわけもなく。ねねちゃんは全く攻撃に移れない。

斧を横にして、盾のように防ぐので精一杯だ。

「グオオオオオー!!!」

一方、弓持ちの方も武器を大劍に変えて私に接近してきた。

ぼたん「うわあ、やっばいw」

咄嗟に近くの木に登つて上を取る。それと同時に劍が私が登つた木を切り倒す。

ぼたん「いや嘘やんwww」

劍で木切つたぞコイツw

ねね「やっばいよコレ……っ!!」

木が倒れる前に他の木に飛び移つた。ちらりとねねちゃんの方を見ると、所々で防ぎ

きれずに切り傷が出来ている。

これは予想以上にマズイ。おまるんもなんとか遠くに逃げたし、私達も離脱しないと。

けど、どっちへ逃げるべきか？おまるん達と離れるのは、危険ではある。けど今元気モリモリなこいつらを連れて行っても、同じことの繰り返しなのは目見えるわけで……まじどうしようか。

ぼたん「………。」

ねね「はあっ……はあっ……!!!」

ねねちゃんに限界だな。そもそも獣人なんて見るからに身体スペックが違う相手に、武器まで相性有利。

だっていうのにねねちゃんは、肉体は瑞々しくなっても、種族はヒューマン。ここまです耐えただけでも相当だ。

ぼたん「……しゃーねえな。SSRBは、この状態に入れる保険あったら紹介してくれよな。」

覚悟は決めた。よろしい。ならば実行だ。

一本だけ手に入った弓を番えて、槍持ちに照準を合わせる。

ねね「ねねも頑張るぞ!!」ぼたん「成長したな……ねねちゃん。」

こんねね〜！挨拶は大事！桃鈴ねねです!!

怖いです!!

ライオンが武器持って襲って来たんだもの。怖くないわけないよなあ!?

けど、それよりも今は未来が怖い。

ししろんが笑ってた。普段のゲライオンのじゃない。これは、ブラック時代に見たことがある顔だ。

『自分が死ぬかもしれないことを自覚している顔』だ。それでも後に引けない、逃げられない顔。

友達が、そんな顔してて欲しいわけがない。本当に死にかねない。

ぼたん「ねねちゃん、そいつにトドメ刺して!!」

そんな必死な顔で言わないでほしいよ。そんな必死な声で。

この状況でそんな事思うねねの方が絶対におかしい。それでも、ねねはみんなに笑ってほしいんだよ。

「——!!」

だから起き上がった。斧を拾って。足の痛みは無視！超痛いけど無視!!

歯を食いしばって、涙が出てくるのも構うこと無くししろんが蹴り飛ばした獣人の頭に斧でクラーツシュ!!

「グオオオオオ!!」

プシュー——ツツツ!!

ねねの斧が獣人の頭にたどり着く直前に、獣人が槍を向けてきた。防御なんて頭になかったらしく、放たれた槍が、ねねの頬を僅かに掠る。

ねね「はあっ：：はあっ：：はあっ：：!!」

頬から流れる血を拭いながら、息を整える。

ドラゴンの時とは違う、嫌な気持ちで心を蝕んでくる。本能だけで襲ってきていたと

思うドラゴンとは違って、獣人達はヒトに近い形に、武器を扱って、狩りのように襲ってくる。

まるで、人を殺したような、嫌な気持ちに……押しつぶされそう。

挟まれた足が痛い。重い斧を力ずくで振り回したせいで、余計に負担がかかったんだ。

痛いし、怖いし、辛い。もう無理……っ

押しつぶされ——

ぼたん「うおおおおおおおおお——！！！！」

ねね「??？」

押しつぶされそうになった瞬間、ししろんが吠えた。

ぼたん「せめて、ねねちゃんだけでも逃してみせる。」

ねね「……ししろん……」

弱い気持ちに押しつぶされそうになりかけた。そんな場合じゃないだろねね!!
ししろんはもう丸腰なんだ!ねねがやるんだ!足が痛い?怖い?もう無理?

ねね「——無理は嘘つきの言葉だあああああああああ——!!!!!!」
喉が枯れるほど叫ぶ。弱い気持ちを押しつぶすために。もう一度すーぱー!!ねねちに
……!!

《桃鈴ねねがスキル：【糞ブラック根性論】を獲得しました。》

ぼたん「え?今何か声が聴こえた……??」

ねね「——痛みが消えた……!?よし、行ける!!」

ししろんが一瞬だけ隙が出来たのを見逃さない弓持ちの獣人がまた大剣を構え直して襲いかかる。

「グオウ!!」

ぼたん「うおっと!」

ねね「ししろん、下がってて!!後は私がやる!!」

ぼたん「ねねちゃん!?足は大丈夫なの!」

ねね「大丈夫!痛くないよ!!」

さつきまでが嘘みただ。カラダが軽い。

斧が手足のように振るえる。

その時、初めてこいつに打ち勝った。もうやるならここしかない!!
迷ってる暇なんて無い!!

ねね「——!!『爆裂セクシーねねち斬』!!!」

薄っすらとカラダから湧き上がる赤いオーラが、昨日と同じく斧に移動する。
今できる全力——ぶつけていこう!!!

ねね「——ゲフツ——!?!」

吐いた。唐突に、赤い何かを……あともう少しの所なのに、斧が当たらない。意識が

……遠……い

ししろん……

《獅白ぼたんがスキル「ライオン・プライド」を獲得しました。》

ぼたん「うおりやあああああああああ——!!!」

最後に聴こえたのは、いつもの、ねねが大好きな、ししろんの声だった……。

『ポルカ、おるか？ポルカおらんかー？』ポルカ「サモナ
イト石返せ」

ラミイ「……………ここ、どこ……………？」

……………歩いている。

わたしは、おまるんの背に乗っていたはずだったのに？

……………歩いている。

たった一人で？

……………歩いて、いる。

みんなはどこ？

……………歩いて……………いる。

何処に歩いているの？

……………歩いて……………いる……………。

「ふうん……………こんな島にまた召喚される人がいるなんてねえ……………」

だ……………れ……………??

「ねえ、お姉さん。どこから来たの?」

分からない……………。

「何処へ向かうの?」

分からない……………。

「あらら〜これはこれは……………ちよ〜つといけない状態になつてるなあ。」

みんな……………。

「うん?どうしたの?」

みんな……………を……………助けて……………

「何があつたのかな?」

襲われ……………てる、の。

「それは大変。じゃあ、お姉さんが助けてあげないと。」

わたしに……………何が、出来るの……………??

「簡単なことが出来るんだよ。お姉ちゃんが出来ることだけのこと。」

ラミイに……………出来ること……………??

なにが……………出来るの?わたしに……………なにが??

「例えば、懐の召喚獣を喚ぶのはどう?その子、とっても強い繋がりを感じるよ?」

召喚獣……？やめな……？

でも、一度出て来てから、全然出てこなくなつて…

「それはね、召喚術の中には、絆が必要なものもあるからだよ。」

絆……？

「よく思い出してみて、お姉さん。その子を呼ぶ時、何がしたかったの？」

……わたしは………

—————

ポルカおるかー？おるよー。5期生の金髪のプロペラが回る方、尾丸ポルカでーす。多分もうすぐ死にまーす!!ポルカ終わるかー？

アンケートでポルカ望んだやつら絶対許さんからな!!!おかげでポルカは今——

獣人×50「—————!!!」

ポルカ「ぎゃあああああ!!」

ししろんとねねちが引き受けてくれた敵の2.5倍の数の敵に追われとるんやぞ!!!!

しかも背中にはラミイ!!ここまで一度も離してない!!ポルカ偉い!!!!

でした。

ああ……最期の記憶としては、最高じゃねえか。そう思うだろ?雪民。ちなみに、ポルカの顔はラミイの胸と腕の中だ。包み込まれてる。羨ましいだろ?もう何も怖くねえ。2秒後に横たわるポルカの未来だつて……

ポルカ「ごわいよおおおおおーラミイいいいいいいー!!死にたくないいいいいいいいいー!!!」(泣)

ラミイ「大丈夫だよ……ハア……つ、ラミイが……つ護るから……」。

そう言うと、ラミイはポルカを抱きしめていた片腕を敵の前に差し出した。

ポルカ「ま、まさかラミイ自分の腕を!」

ラミイのポルカを抱きしめる腕の力が一層強くなる。役得です!!

ラミイ「……行くよ……『やめな』」

四界の一。幻獣界・メイトルパに連なる新生よ、その生命を持って絆に新たな力を授け給え。召喚

——『サンドバックやめなー!』

ポルカ「………お?なんか気持ちいい。」

ラミイ「——ふう。ねねねと一緒に召喚した時は『ムキムキねねち』になったように、おまると一緒に召喚した時の『やめな』の能力は!」

串刺しにされて空気の抜けた風船みたいになった『せやな』が何故か浮き上がって変形する!!

赤い!三角!!なんか入れそう!!うわゝ楽しそうww

ポルカ「つて、ポルカサーカスやないかい!!何で『やめな』がサーカステントになるのさ!」

ラミイ「さ……さあ……?」

ポルカサーカス『誓約の儀式を始めるよ!サモナイト石を入れてねっ。』

誓約の儀式を始めるよ!サモナイト石を入れてねっ。(おまるとんボイス)』

私達二人が唾然としていると、ポルカサーカスが喋りだした。何故かポルカの声で………。

ポルカ「うがあああああああああああーっ
ポルカサーカス『ポルカ・オ・ドルカ?』
っ
!!!!
」

ポルカ・ラミイ（絶句）

みなさんこんにちは。おひさしぶりです。ポルカはいきてます。

なんか4ヶ月くらい走らされ続けた気がする4分間。

『まだまだ着いておいで、笑い転げちやうサーカス！きつとつ、ここだけだよ♪』

まさか歌の4分と4ヶ月を掛けるためだけに更新4ヶ月サボったんじゃねえだろう
など、ガチ恋距離で問い詰めた今日この頃。皆様いかがお過ごしでしょうか。

ポルカは走った時間はきつちり4分。背負った披露はしつかり4ヶ月分です。今な
らもしかしたらこの胸に溜まった気持ちでポルカも進化出来るかも知れない。

あ、やっぱ無理だ。ポルカの胸、ナーフされてたんだったわ。溜まったもの大してな
いわ。

ラミイ「がんばれーおまるーん。」

5期生の胸がしつかり拘られていた方、雪花ラミイさんはもう完全に緊張感ないなっ
てるよ…。

『今にも世界中を！虜にしちやうから！』

ポルカ「あーようやく歌が終わる……ポルカ、自分の曲が終わることに安堵する初めてのV T u b e r かもしれんわ。

さあ！そろそろいい加減ボラタイムを終わらせて反撃させてもらおうか!!」

『~~~~~♪』

曲の最後の伴奏が終わった。

これから何が起こるのかは分からない。それでも、ここから何かが変わるはずなんだ！

ラミイ「おまるんの反撃が、ついに始まる……!!」

「グオオオオオオオー!!!」

最後まで付いてきてくれたお前たちにも、多少は愛着が湧いた気もするけど……けど、ポルカ達は所詮は別の生き物。同じ世界では生きられない。あの、最初の異世界座員さんのように。

ポルカ「さあ、やめな。ポルカの新たな力を与えたまえ!!!」

ぱつと勢い良く天（に浮いているやめな）に手を伸ばし、今、ポルカの覚醒が始まる。

ラミイ「お、なんか降ってきた。」

「グオツ？」

スコーン!!!

「グギャツ?!?!」

ラミイ「敵に脳天直撃した！おまるんアレ何？こつからじゃよく見えないんだけど」
多分、今ポルカはとつても感情の無い目をしていることでしょう。

ラミイは見えていないらしいが、ポルカにはしつかり見えているからね。アレが何か。アレは……

ポルカ「……………タライじゃねえか。」

そしてさらに

ーココココココココココココココココココココ!!!!!!

まるで英雄王の財宝のように、空からスコールのように降り注ぐ金ダライの雨が、何十体もいた敵さんをギャグ時空のように蹂躪していく。

やられた敵さんは、目をクルクルにして、舌がでろんってなって、もう完全にギャグです。

ラミイ「これ、時間稼ぎにはなりそうだね……………うん」

ポトツ。またなんか降ってきたわ。今度はポルカの足元に。

何だ？ポルカにも金ドライ当てるつもりだったのか？そろそろガチで戦争するか？
ん？

ポルカ「……………芝刈り機」

ラミイ「いでよダイフク！……………なんちゃって。」

その掛け声に呼応したかのように、もう一つ。いや、一体が降ってきた。

ええ。ホロぐらで芝刈り機つつたらもう、聡明な雪民の皆さんには説明すら烏漕がましいでしょうよ。そりやもう、あのダイフクが降ってきましたよ。そして芝刈り機をその手に掴みましたよ。

それでは皆さん。ご唱和ください。

せーのっ

芝刈り機『ぎゅいひひひひひん！バリバリバリバリ……！！』(ラミイ
ボイス)

ラミイの激かわボイスで奏でる芝刈り機の独唱の始まりです。

バックコーラスは先程までタライを食らっていた獣人コーラス隊の皆さんです。いい声ですなー。

ええ。今ポルカが見ている光景。もうお分かりですね。

ダイフクが持つ芝刈り機に引かれて、ぐちゃぐちゃのミンチにされていく獣人達の阿鼻叫喚地獄絵図の光景です……………。

ラミイ「……………。」

ポルカ「タライで昏倒させた後に、後始末の芝刈り機か……………」

ラミイ「……………。（気絶）」

ポルカ「ああ。もうゆつくりお休み。ラミイ。多分全部終わった頃にはその結界も解けるだろうから、そしたらしろんたち探しに行こうな。」

この後、森の一部は真っ赤に染め上がり、やめなーは消えて、透明な石がポルカの手元に出現した。

……………多分、アレはラミイがダイフク呼んだからあの地獄絵図になったんだよ。きつとポルカが使う分には、ギャグ漫画攻撃で済むはずだよ。そう自分に言い聞かせながら、ポルカは初めてまともに戦えるかも知れない手段をギリギリ捨てずに、持ち歩くこ

とにするのだった。

ポルカ「多分、滅多に使わないと思うけどな……」